

# 接続助詞の文末用法をもたらす要因

—相互行為における参与者の認知の観点から—

横森大輔

京都大学大学院人間・環境学研究科

yokomori.d@gmail.com

## 1. はじめに

### 1.1 接続助詞の文末用法

現代の日本語では、接続助詞で発話が終わるという現象が、話し言葉を中心に頻繁に生じている。

#### (1) 【出版社での業務上の対話】

03A : →あ、じゃ、←それあとでやります。そいで、ええーと、これが、これが、あの一、ほら、カメラマンにお支払いしたほう★です。

03B : →これ、←お金、なんにも書いてないんだけど。

03A : ここに書いて、こ、2枚め、ある。

03B : あ、2枚めに。

[現代日本語研究会 1]

#### (2) 【バンドのメンバーが集合したときの対話】

21D : おはよう。

21B : あっ、きょうねー、[名字の一部] ちゃん来るから。

21D : [名字の一部] ちゃん↑、どうしたの一。

21B : いや、実家に帰っちゃうじゃん。

[現代日本語研究会]

これらの例において、ケド・カラの後には、同一話者 (03B および 21B) による発話は続けて行われず、別の会話参与者 (03A および 21D) が発話を行っている。しかしながらケド・カラという語は、接続助詞、すなわち「語と語、節と節を接続する助詞」(益岡・田窪, 1992:51) である。したがって、本来的には以下のように使用されてしかるべきといえる<sup>2</sup>。

(3) これ、お金、なんにも書いてないんだけど、いいのかな。

(4) あっ、きょうねー、○○ちゃん来るから、準備は早めに済ませようね。

以上より、(1) および (2) は接続助詞としての本来的な使用から逸脱した用法といえる。こ

のように接続助詞の後に（円滑な）話者交替が生じている現象を、本稿では便宜上、「接続助詞の文末用法」と呼び、(3) や (4) のような用法を「本来的用法」と呼ぶこととする<sup>3</sup>。

## 1.2 接続助詞の文末用法の言語研究における位置づけ

よく知られているように、Chomsky (1965: 5) は、話し言葉のデータをエラーやノイズが混ざっており言語能力とは峻別される運用能力の問題であるとして、文法研究の対象から排除してきた。これに従えば、話し言葉に特徴的であり規範的な文法から逸脱している現象である「接続助詞の文末用法」は、文法研究の対象にならないということになるかもしれない。しかしながら、この現象はケド・カラをはじめ、様々な接続助詞において体系的に生じており（タイプ頻度が高い）、また、それぞれの語彙においても多くのトークンを持つ（トークン頻度も高い）ことから、単なるエラー・ノイズとして位置づけることは妥当ではない。

何を「文法」と呼ぶべきか、何が「文法研究」の対象になるか、という問題は理論的立場の違いにもよる面も大きく、容易に結論が出るものではない。しかし、接続助詞の文末用法に関して言えば、そのタイプ頻度・トークン頻度の高さを鑑みれば、文法研究の対象とすることには理論的立場の違いを超えて異論は出ないだろう。そして、この現象について考察することは、言語使用と文法の関係という一般的問題に取り組むことであり、結果として言語への用法基盤主義的アプローチ (Langacker, 1987) の一つの実践となるだろう。

## 1.3 論文の目的・方略・構成

本稿の目的は、接続助詞の文末用法をもたらす要因が何かという問題について考察することである。

事例として、接続助詞の中でもケドとカラの二つを取り上げ、これらの文末用法について分析する。一つの語彙ではなく二つを並行的に分析する理由は、文末用法の要因が語彙に固有の性質によるものか接続助詞一般によるものか、という混同をできるだけ避けるためである。また、ケドとカラを選んだのは、先行研究においてこれらの文末用法が特に言及されることが多いため、現象に対する論点を整理することが容易であるからである。

本稿は以下のように構成される。まず次の第2節において、接続助詞の文末用法をもたらす要因に言及している先行研究を概観し、論点を整理する。続く第3節において、先行研究における問題点を解決するため、発話が話し手による自律的な活動ではなく、発話形式が聞き手の参与の仕方に本質的に依存している、という視点を導入する。そのような相互行為的な視点に基づき、第4節ではケドおよびカラの文末用法の事例を検討し、この現象が「コミュニケーションにおける聞き手の能動的参与」という要因によってもたらされていることを主張する。最後の第5節では全体のまとめと残された問題について述べる。

## 2. 先行研究の批判的検討

本節では、接続助詞の文末用法の要因に関して、言及を行っている研究に対する批判的検討を通じて、検討すべき論点を整理する。

### 2.1 益岡隆志・田窪行則

益岡・田窪(1992)は接続助詞の文末用法について、省略の一種として位置づけ、以下のように述べている。

(5) 従属節だけを述べれば、結論が推測できる場合、主節を省略することができる

4。自分が結論を出すより、相手に出させる方が丁寧になる場合、結論を曖昧にしたい場合、結論部分が慣用的に決まっている場合、等に使われる。

(益岡・田窪, 1992: 172)

(6) a. 田中ですけど(山田君いますか)。

b. 私はここにいますから(用があったら呼んでください)。 (ibid.)

(5)の一般化は、現象の記述としては問題がないが、説明としては不十分であるように思われる。というのも、「従属節だけを述べれば、結論が推測できる場合」という条件の内実が明らかで無いからである。つまり、益岡と田窪は事例として(6)をあげているが、「山田君いますか」や「用があったら呼んでください」といった「結論」が、どのような過程で「推測」されたのか、その過程でケド・カラといった語彙がどのように貢献しているか、といったことが明らかでないのだ。

ここで仮に「結論が推測できる」ことが、「聞き手は、話し手が意図した主節を一意に復元できる」ことを指すものとしよう。これは条件として厳密であり明確だが、多くの事例と矛盾する。例えば以下のように、必ずしも主節を一意には同定できない事例が存在するからである。

(7) これ、お金、なんにも書いてないんだけど、

a. このままでいいんだろうか。

b. どうして?

c. 気付いてる?

d. 書いてもらえますよね。

一方で、「結論が推測できる」ことが、「聞き手は、話し手の意図と一致するかどうかはともかく、主節に相当する内容について何らかの候補をたてることができる」ことを指すとしよう。これは上記のものを含め多くの事例と矛盾を生じないが、条件としては余りに蓋然的である。そもそも従属節を聞いて、対応する主節に関して(その意味での)「推測」

が全く不可能な場合は稀であろう。つまり、この意味での「従属節だけを述べれば結論が推測できる」ということは、従属節が使用された場合一般の性質であり、主節が発話されないことの説明にはならない。

益岡と田窪の一般化のように現象を単なる「省略」として捉えた場合、なぜあるときは従属節が主節を伴い、別のときには伴わないのか、という問題に答えられない。

## 2.2 高橋太郎

「接続助詞の文末用法」を単なる「省略」ではなく、固有の機能をもつ表現として捉える研究としては、高橋 (1993) があげられる。以下は、高橋 (1993) からの引用である。

- (8) a. 文がはなしをくみだてる単位、つまり、言語活動の単位、あるいは、コミュニケーションの単位になることができるのは、文に**のべかた**があるからである。(p.19)
- b. ここで「**のべかた**」(陳述性)といっているのは、**のべたて** (declarative)、**たずね** (interrogative)、**はたらきかけ** (imperative) など、ききてに対する「**のべかけかた**」と、断定、推量など、ことがらに対する「**とらえかた**」などをふくむ、はなしてによる現実への関係づけである。(p.18)
- c. **のべかけかたは、文の成立にどうしてもかかすことのできない条件のひとつである。**(p.19)
- d. もともとの述語が省略された文であっても、**文として成立していれば、その文は、のべかけかたを持っている。**のべかけかたが文の成立条件だということは、そういうことである。(p.19)
- e. 接続助辞で文がおわっていて、本来あるべき主節の省略されている文が非常にたくさんある。こうした文でも、**それぞれの接続助辞でむすばれる従属節の主節に対する関係的意味の性質が、基本的には、のこっていて、「から」でおわる文は理由的、「けど」で終わる文は逆説的なニュアンスのあるものがおおい。**(p.21)
- f. これらの形式がここで文をおわらせるとしても、意味のうえで、もし、もとの意味をただひきついでいるだけだとすれば、それはみじかい文の形式をつくるという、能率的なだけの消極的な形式にすぎないというよりしかたないだろう。しかし、この形式は、文の内容としての、**ことがらの論理関係をあらわすだけでなく、はなしての、ききてに対するやりとり関係にかかわる役割をも演じることになる。**これは、**従属節時代にはなかったことである。**(p.22)
- g. こういう転成は、**従属節の述語から、文の述語へという機能の変化の結果として生じたものである**という認識が必要である。

- h. 省略による述語形式は、だいたいにおいて、**文脈のおせわにならなくても、それがどんなのべかけかたの文であるかを理解することができる。**

つまり、ある段階では主節の単なる省略だったものが、機能の変化を経て固有の機能を持つ文末形式となった、というのが高橋の論である。以下のように図式化できよう。

- (9) 本来の用法：のべかけかたは主節にある。  
 ↓<省略> (復元可能な要素をいわない)  
 ただの省略：のべかけかたは省略された主節にある。  
 ↓<機能の変化>  
 述語化(文末形式化)：それ自体がのべかけかたを持つ。

高橋は、この現象に単なる省略としての段階だけでなく、固有の機能を持つ段階を認めている点で、益岡・田窪(1992)よりも言語使用の現実に応じた粒度の高い記述といえる。しかしながら、説明モデルとしては以下のような問題がある。

最も重要な問題点は、「のべかけかた」および「はなしての、ききてに対するやりとり関係にかかわる役割」といった固有の機能が何に由来するのか、という重要な問題については「機能の変化の結果」としか述べられていないことである。これでは「機能が変化した結果、固有の機能が生じた」という循環論に過ぎない。

また、機能が変化する前の段階の記述として、「従属節時代」の接続助詞が、本当に「ことごらの論理関係をあらわすだけ」なのかどうかは疑わしい。さらに機能の変化後の段階の記述として、ケド・カラの文末用法における「文脈のおせわにならなくても」「理解することができる」「のべかけかた」が何なのか、結局のところ明確にされていない。

高橋の研究は、「省略」だけでは説明がつかない段階を認めた点は意義深いだが、その説明はほとんどなされておらず、それと連動するように記述にも不十分な点が残っている。

### 2.3 大堀壽夫

Ohori (1995) は、中断節構文 (suspended clause constructions) の一種としてケド・カラの文末用法をとりあげ、それぞれ以下のように一般化している。

- (10) X-KEDO, Y ('Though X, Y') => X-KEDO,  $\phi$  ('Though X, that's not the whole story')  
 (11) X-KARA, Y ('X, so Y') => X-KARA,  $\phi$  ('X, so you know what,' or 'X, so it concerns me/you')

これらの更なる一般化として以下のように述べる。

- (12) What is common to these constructions is that they occur when the (pseudo-)logical consequence is contextually inferable. Markers for concession and reason are typically inference-intensive (i.e. they put various sorts of constraints on interpretation), and with these markers, the hearer tries to infer what is coming after the dependent clause more actively than otherwise. This means that, when faced with suspended clauses, the hearer must infer what may come after them. In doing so, relevant aspects of the context are picked up and generalized. When they are sufficiently generalized, they become conventionalized part of the construction.

つまり、接続表現は、それに続く主節に対する聞き手の解釈を特定の方向に誘導するものであり、もし接続表現で言い終えられると、聞き手は文脈を参照することで主節の内容を推論する。そのような使用が繰り返されることで慣習化が生じ、一般化された推論が形式そのものと結びついた効果となった、ということである。

大堀は、高橋と同様、接続助詞の文末用法に本来の用法からは予測されない固有の機能があることを認めている。更に、その固有の機能の由来を、一部は接続助詞の本来の機能に還元され、一部は使用文脈に還元される、と説明している点で、高橋よりも説明的妥当性が非常に高い。加えて、それぞれの固有の機能について (10) や (11) のような明示的な一般化を行っている点も、それまでの先行研究に比べて優れているといえる。

問題は以下の点である。大堀は、接続助詞の文末用法における語用論的效果は、形式そのものによって担われている、という点を強調している。

- (13) [S]uspended clauses have their own discourse functions that are not manifest in non-suspended version, and their well-formedness conditions must be specified as a set of features that pertain to particular lexico-grammatical configurations. Notice that the pragmatic effects of suspended clauses we have examined so far are only partially reducible to the properties of clause-linking devices themselves.

しかし、大堀が述べるほど、接続助詞の文末用法は文脈特性が慣習化された表現なのだろうか。接続助詞の文末用法は、主節が現れているかどうかという点を除いては、本来の用法と音韻・形態的な特徴は変わっていない。つまり、主節が現れるかどうかは、実時間上においては主節が現れるはずの位置になるまで予測できないはずである。にもかかわらず「形式に固有の効果がある」というのには問題がある。例えば、以下の例で、カラで終わっている A の発話には、「固有の効果」があるのだろうか。

- (14) A : A 3をB 4に縮小してかまわないから。  
 B : わかりました。やっておきます。  
 A : ありがとう。

大堀の一般化に従えば、「接続助詞カラの元の意味に還元できない固有の効果」が「カラで言い終わるとい形式に慣習化されている」としてよさそうである。ところで上記の例は、実際には以下のような対話の中に観察されるものである。

(15) 【会社員同士の対話】

- 02A : それはあの、縮小してよ、B 4に。  
 02B : はい。  
 02A : A 3をB 4に縮小してかまわないから。  
 02B : はい。  
 02A : うん。  
 02B : はい。  
 02A : ねっ、お願いします。

[現代日本語研究会]

これは、以下のいずれのように展開していたとしても全く不自然ではない。

- (16) A : A 3をB 4に縮小してかまわないから、お願いします。  
 B : わかりました。やっておきます。  
 A : ありがとう。

このように比較してみると、「～から」とい形式が果たす機能が(14)と(16)の間で本質的に異なっているとは考えがたい。また(15)を文末用法とするべきなのか本来的用法とするべきなのかも線が引き難い。

この例に関して言えば、主節が言語化されるかどうかは、聞き手がいつの段階で了解の意思を表明したか、ということに帰属されるだろう。一般に、接続助詞が文末用法となるか本来的用法となるかということは、聞き手の応答を含めた会話のその場の展開次第でしか決まらないものである。大堀が強調する「接続助詞の元の意味に還元できない固有の効果」が、「接続助詞で言い終わるとい形式に慣習化されている」と説明する必然性は認められない。「接続助詞の元の意味に還元できない固有の効果」は、聞き手の応答を含めたその場の展開の中でその都度現れている、と考えるほうが妥当であるように思われる。

そもそも、言語形式と語用論的な効果を一対一で対応付けることには様々な問題点がある(Levinson, 1979)はずだが、大堀は言語以外の要因による効果までも言語形式に不当に還元しようとしているようだ。

## 2.4 本多啓

大堀よりも「会話における第二話者としての聞き手が果たす役割」を重視したのが本多(2001)の論考である。本多は、「単一の文を述べるという行為が複数の話者の共同行為として行われること」すなわち「共話」が日本語の会話に頻出することに注目している。本多によれば、「共話は文構築の共同行為性を直接に反映した現象」であり、それが反映している現象の一つとして接続助詞の文末用法があるという。本多は、事例としてカラの文末用法を取り上げ、以下のようなタイプをあげている。

- (17) a. 「から」と主節の間に他の発話が割り込んでいる場合
- b. 共話的な補完
- c. 明示的に補完されない共話の構成要素としての「から」
- d. 言語行為への理由付け・行為一般への理由付け
- e. 「P から」という言語行為への自己言及的な理由付け

例えば (c) の場合は、次のように説明される。

- (18) (第一) 話者がいいさした発話の補完部分に相当する内容(含意)が先行談話や発話状況から明らかであると聞き手(第二話者)が認識した場合や、(第一) 話者の発話に基づく聞き手の推論の方向性が慣習的に決まっている(含意の慣習化が起こっている) 場合などには、(第一) 話者による言いさしを聞き手(第二話者)が補完しないことがある。(・・・) **これは共話における第二話者の補完が現実の発話としては実現されなかった場合とみることができる。**これが慣習化することによって、接続表現が終助詞としての機能を帯びる、あるいは接続表現が終助詞に転化する、という文法化が起きる。

しかし、「聞き手による文の共同構築」という観点が強調されているのはこの (c) の場合のみで、これが接続助詞の文末用法の一部に関する要因なのか、より一般的なもののなのか、明らかでない。従って、「から」の文末用法のうち、本来的用法から予測が容易である (a) から (c) と、予測が難しい (d) および (e) の間における一貫性が見えない。特に、(d) および (e) のような、より状況依存的な用法における聞き手の役割への言及の乏しさは残念である。

本多は、形式成立における聞き手の積極的な役割をとらえようとした点では評価されるべきだが、聞き手が担う役割を「話し手との文の共同構築」という言語的な問題に還元しようとした点に問題点がある。話し手と聞き手が共同で営む作業としてのコミュニケーションにおいて、「文」という言語単位の形式的な成立は本質的なものではないはずである。



## 2.5 論点のまとめ：代替アプローチに向けて

以上、接続助詞の文末用法の要因に言及した4つの先行研究を検討した。これまでに明らかになった論点をまとめると以下ようになる。

まず、益岡・田窪(1992)のように、現象を省略として捉え主節が還元されるものとしたのでは、なぜある状況では主節が発話され、別の状況では発話されないのか説明がつかない。これに対し、高橋(1993)のように接続助詞の文末用法という形式自体に固有の語用論的効果が符号化されていると考えると、逆に本来的用法との連続性が説明できない。Ohori(1995)が述べたとおり、接続助詞の文末用法の性質は、部分的には接続助詞の語彙的意味に還元され、部分的には文脈の要因に還元されると考えるのが妥当であろう。しかし、(14)から(16)の例で観察したように、従属節が発話が本来的用法となるか文末用法となるかは、同じ言語形式であっても文脈ごとに大きく揺れるものである。すなわち大堀の主張とは異なり、文脈の特性が形式に慣習化されているというのは強すぎる一般化であり、むしろその場の聞き手が、従属節から何を理解し、どう反応するか、という要因が重要と考えられる。本多(2001)は聞き手の果たす役割に注目することを提案したが、「文」という言語的な分析単位にとらわれてしまい、実際の聞き手の振る舞いを十全に記述できていない。

どのような文脈においてどのような従属節を聞けば、聞き手は主節を聞かずに応答することが可能になるのか。このような観点から現象を分析することこそが、本多の試みた「共話」によるアプローチをより一般的な枠組みに位置づけることであり、益岡と田窪による「従属節だけを述べれば、結論が推測できる場合、主節を省略することができる」という言明に実質を与えることになるはずである。

## 3. 相互行為における参与者の認知の観点から

以上の問題意識から、本節では相互行為における参与者の認知の観点から現象を捉え直し、代替アプローチを提案する。

### 3.1 聞き手の認知の能動性

2.3節でみたように、接続助詞で言い終わるということは、それ自体が選択された言語使用の形式であるというよりも、コミュニケーションが展開する中で結果として現れているものとして捉えなおす必要があるだろう。例えばケドに関して、聞き手側の対応次第で、文末用法になるかどうかが決まる場合がある。

#### (19) 【大学図書館の入り口での訪問者Aと職員Bの対話】

A: すいません、学外のものなんですけど。

B: はい。

A: 入館することってできますか?

B：はい、ではこの用紙に必要事項を記入してください。

A：(記入する)

(20) A：すいません、学外のものなんですけど。

B：はい、ではこの用紙に必要事項を記入してください。

A：(記入する)

(19)はケドの本来の用法、(20)は文末用法の例である。これら2例の違いは、聞き手がケドの直後にターンをとったかどうかという点のみである。後者の場合、話し手による相互行為の展開が、聞き手によって予測されたために、ケドの直後に聞き手がターンを始めることができていると考えられる。聞き手による談話展開の予期は、当然ながら失敗する場合もある。

(21) A：すいません、学外のものなんですけど。

B：はい、ではこの用紙に必要事項を記入してください。

A：あ、いや、構内の食堂の場所を教えてくださいませんか？

ここでBが行った応答は、Aの意図したものとは外れている。しかしここで重要なのは、いずれにせよ始めのAの発話がケドで終わり、別の参加者が独立した発話を行っている、すなわちケドの文末用法が成立している点である。

すなわち、聞き手にとって相手の従属節発話の直後に応答するのに必要なのは、話し手の心中を正確に推定することそのものではなく、発話の場に存在する情報を能動的に利用し、ケド節に続く談話展開を理解することである。

### 3.2 非言語的の手掛かりの情報利用

発話を理解するために利用される情報には、「言語によって利用可能にされた情報」に限られず、「言語によらずとも利用可能な情報」もある。当然のことながら両者は排他的ではない。後者において特に重要なのは話し手が相互行為に従事するゴールである。

(22) 【駅前雨の音】

松竹： ここでつつ立ってたって、三河は帰ってきませんって。さー・・・そろそろ帰ろ・・・ン？あれ？三河だ、こっち歩いてくるぞ。あら、なんか怒ってる・・・。

三河： (近づいてくる)もーッ。

松竹： どうした？カレいなかったのか？

[土曜ドラマ館]

この例では、「どうした?カレいなかったのか?」と声を掛けることができるのは、<歩いてくる様子>およびくもーっ>という感動詞の発声といった非言語的情報を手掛かりとして、他者が何に向っているかを察することができるからである。ここに示されるように、相互行為が達成されるためには、文が形式的に成立している必要は無く、場合によっては言語記号が全く無くともよい。手掛かりが言語的であれ非言語的であれ、利用可能な情報は全て相互行為に貢献する。

### 3.3 分散的に喚起される他者のゴールの情報利用

Thomas (1995) が指摘している通り、会話の参加者は別の参加者が何をゴールとしているかに敏感である。例えば次は、ある女性 (A) が、B の家を訪ね、外に止めてある車を指して言った発話とそれに対する応答である。

- (23) A: Is that your car?  
 B: Why do you want to know? (Thomas, 1995: 141)

同様に Levinson (1981) は、「話し手は、単一の発話において動機/発話媒介的意図の大連鎖を持つことがある」と述べる。(24)に対する返答は(25)のいずれでもよい。

- (24) It's getting late, Mildred.  
 (25) a. It's only 11.15 darling.  
 b. But I'm having such a good time.  
 c. Do you want to go?  
 d. Aren't you enjoying yourself dear? (Levinson, 1981: 477)

(a) は【what is said への直接に対して】、(b) は【一緒に帰ろうという欲求に対して】、(c) は【帰りたいという望みに対して】、(d)は【根本的動機に対して】行われた応答である。すなわち、(b-d) は直前の発話に対する直接的な応答というより、直前の発話を行った相手の高次のゴールに対する応答である。ここには、発話理解にとって発話者のゴールの理解が本質的なものであることが示されている。

また、Levinson (1983) は、会話参加者が相手のゴールを理解することで、発話が理解されるだけでなく、相手の先回りをした応答が可能になるということ、間接的な依頼の発話を例に論じている。次のような例は、一般的には間接発話行為とされるものである。

- (26) S: Have you got Embassy Gold please?  
 H: Yes dear ((手渡す)) (Levinson, 1983: 361)

このような現象に対して Levinson は、よりマクロな会話構造としての〈依頼〉の連鎖がショートカットされたものとして分析した。すなわち、依頼行為は、それに先行する連鎖として、依頼の前提条件の確認を行う発話とそれに対する“GO AHEAD”という発話対が必要である。

- (27) 【位置 1】 A: Hi. Do you have uh size C flashlight batteries?((PRE-REQUEST))  
 【位置 2】 B: Yes sir ((GO AHEAD))  
 【位置 3】 A: I'll have four please ((REQUEST))  
 【位置 4】 B: ((turns to get)) ((RESPONSE))  
 (Levinson, 1983: 357)

一方、この連鎖の全てが実現するわけではない。一般的な人間の行為の制約として、何かをしたい場合にはくできるだけ何もせずに物が手に入る〉のが最も好ましく、〈相手からの申し出がなされる〉のが次に好ましく、〈明示的に依頼を行う〉のが最も好まれない。これは会話の連鎖構造に対応させると以下ようになる。

- (28) (i) 最も好ましい 【位置 1】 : (pre-request)  
 【位置 4】 : (response to non-overt request)
- (ii) 次に好ましい 【位置 1】 : (pre-request)  
 【位置 2'】 : (offer)  
 【位置 3'】 : (acceptance of offer)
- (iii) 最も好ましくない 【位置 1】 : (pre-request)  
 【位置 2】 : (go ahead)  
 【位置 3】 : (request)  
 【位置 4】 : (compliance) (Levinson, 1983: 361)

すなわち、聞き手にとって話し手のゴールが理解されれば、連鎖の一部をショートカットすることは可能であり、かつ一般的に好まれることなのである。

重要なのは、他者のゴールは、様々に分散する手掛かりの聞き手による能動的利用によって理解されるということである。

### 3.4 相互作用における接続助詞

次の例をみてみよう。

- (29) a. 花子は非常に有能だった**から**、上司から疎んじられた。  
 b. 花子は非常に有能だった**けど**、上司から疎んじられた。

この2つの文はいずれも、『花子は非常に有能だった』が真であり、かつ『花子は上司から疎んじられた』が真である」という同一の真理条件を持つ。しかしながら、実際に使用される文脈条件が異なるのは明らかである。

Blakemore (1987) は、概念的意味 (conceptual meaning) と手続き的意味 (procedural meaning) という区分を設定し、接続表現が担うのは後者の意味である、とした。つまり、名詞や動詞が概念表示を表すのに対し、接続表現はそれら概念表示の聞き手における処理の仕方を指定するものである、という。つまり、「接続表現は、聞き手の発話理解における推論の方向性を指定する」ということである。従って、いわゆる順接・逆接という命題間の関係は、聞き手の談話処理という観点から以下のように一般化することができる。

(30) [PカラQ]

Pに基づけば、Qを述べるという談話展開は、聞き手にとって妥当だ

(31) [PケドQ]

Pに基づけば、Qを述べるという談話展開は、聞き手にとって予想外だ

すなわち、(29a) の例では「花子は上司から疎んじられた」という主節の結論の妥当性を保証するために「花子は非常に有能だった」という理由付けを行っている。一方、(29b) の例では一見予想外なものとして、「花子は上司から疎んじられた」という主節を位置づけている。

既にみたように、言語的な情報は、発話の場において利用可能な情報の一つに過ぎない。聞き手は、話し手の非言語的行動、および全体としての話し手のゴールなどを手掛かりとなる情報として利用している。そのようなマクロな観点からみれば、カラ・ケドに導かれる従属節は、次のような認知機能を果たしているといえる。

(32) [Pカラ]

発話の場において利用可能な情報 I は、Pに基づく展開としては (あなたにとって) 妥当だ

(33) [Pケド]

発話の場において利用可能な情報 I は、Pに基づく展開としては (あなたにとって) 予想外だ

### 3.4 接続助詞の文末用法をもたらす要因

したがって、カラの文末用法およびケドの文末用法の成立条件は以下ようになる。

## (34) [Pカラ] の成立条件

「P に基づくと妥当な情報 I」が発話の場において、聞き手によって利用可能である。

## (35) [Pケド] の成立条件

「P に基づくと予想外な情報 I」が発話の場において、聞き手によって利用可能である。

## 4. 事例分析

以上のような一般化に基づき、いくつかの変数から接続助詞の文末用法のバリエーションを記述することができる。

## 4.1 発話による情報利用

以下は、話し手自身の直前の発話が、カラ節にとって妥当なものとして理解されるために文末用法が可能になっている例である。

## (36) 【学生時代の語学の選択について】

09A : だいたいドイツ語選んでるよね、みんな。

09L : 機械科は、ほんとはなんかドイツ語のほうがいいってゆう話ですよ。  
専門書がドイツ語のやつが多いから。

09A : そんなの気にしてないすよ、だって1年の時なんかさー、{そうですよね (09L)} なんにもやってないうちに選ぶんだから。

09L : そうですよね

[現代日本語研究会]

同様の例がケドの場合にも存在する。

- (37) 「先頭打者なんで、ビジターだし、一番最初に打席に立つことになる。すごく光栄だし、チームを勢いづけるためにも、塁に出られるかが大きい。出られなくても、切り替えていきますけど」 決戦前夜のナイター練習。敵地に足を踏み入れた赤星が、すがすがしい表情で、意気込みを語った。 [サンケイスポーツ]

また、次の例では、他者の発話によって活性化された命題<スウェーデンに行く>がカラ節の対象である。

(38) 09M : なんでスウェーデンなんか行くの。なんで行くの↑

09K : いや、夏、暑かったから。<笑い 複数>

09M : なんか違う理由があるんじゃないの。〈笑い 複数〉

[現代日本語研究会]

#### 4.2 発話行為および行為による情報利用

また、発話そのものというより発話による行為が、従属節が修飾する対象になる場合もある。次の例では、〈呼び寄せる〉という発話による行為の正当性が、カラ節によって保証されている。

(39) 天使：(異質なエコー) ちょっと、そのあなた、あなた!

玲子：エッ、あたし?

天使：そう、あなたですよ。こっち、こっちです。受付けますから。

玲子：受付? こっつてどこなのか?

[土曜ドラマ館]

次の例では、〈話を止める〉という一般的行為に対する正当性を保証するものとして用いられている。

(40) 行員：ホント懐かしいわね、石川君。何年振りかしら。

強盗：高校の卒業以来だから、12年ぶりかな。富士子ちゃんは相変わらずかわいいけど、お互いもう30か。

行員：シッ!私、ここではまだ24で通してるんだから。

強盗：24!それはちょっとサバよみすぎじゃない。

[土曜ドラマ館]

次の例は新聞記事からの抜粋だが、発話者の行為〈一枚の図面を広げた〉が利用可能な情報であり、その予想外性の言及となっている。

(41) 「まだ公開はできないけど」—そう言って、彼女は一枚の図面を広げた。

[毎日新聞]

#### 4.3 分散的に利用される話し手のゴール

次の例では、〈男女が互いの意見を言い合っている〉という、全体としての状況があり、その中で〈自分の意見の主張〉という全体として従事している活動に対する正当性の付与として、カラの文末用法が連続している。これはある一つの行為にというより、その場の状況全体に対する修飾表現として用いられているといえるだろう。この場合の状況全体とは、単一の要素に帰属されるものではなく、分散的に理解されるものである。

- (42) 女：犬はもっと凄いわよ！水の中潜って空き缶拾って来たり、自転車に乗る犬もいるのよ！  
 男：自転車に乗る犬？嘘だろ！  
 女：本当だって！テレビで見たんだから。ちゃんと自転車に乗ってこぐんだから！  
 男：こぐ？はははははっ、俺は信じない！  
 女：バカねえ！本当なんだから！  
 男：信じない！犬が自転車こぐ？どうやって？  
 女：ちゃんとこうしてハンドル持って、足でペダルを踏んでこうやってこいで進むんだから！  
 男：ちゃんちゃらおかしいよ！前代未聞だ！ [土曜ドラマ館]

次の例では、状況から分散的に話し手のゴールとして、＜聞き手に対し催促を行う＞ということが理解される。「注文まだなんだ」は、談話の展開としての準備条件に言及している。

- (43) 耕作：あの・・・。  
 ミウ：なに？  
 耕作：私、注文まだなんだけど。  
 ミウ：あっ、ごめんなさい。そうだったわね。何にします。焼きそば？それともラーメン？  
 耕作：いえ、私も是非その『7番』を。 [土曜ドラマ館]

このようにケド節は一般に、話題導入のマーカーとして用いられる。次の例も、話し手である生徒が＜困っている＞という全体的状況に対し、話題を提示することで、聞き手の応答を呼び起こしている。

- (44) 【職員室での教員(C)と生徒(I)の会話】  
 11C : [名前(11E)] 先生↑＜生徒に対して＞  
 11I : はい。  
 11C : [名前(11E)] 先生、きょうお休みだなー。忌引なの、なーに↑  
 11I : きょう、呼ばれてきたんですけど。  
 11C : 呼ばれてるー↑ なんのことで↑  
 11I : 提出物のー。  
 11C : 提出物ー↑ [現代日本語研究会]



次の例では、話し手と聞き手がく待ち合わせ場所を決める>という共同行為に従事していることが前提となって、この用法が可能になっている。

(45) 浜崎：うん、まあな。・・・明日さあ、岡村に会いに行くけど、お前も来る？

ユキ：え？本当？行く行く！

浜崎：じゃあ、十時過ぎにそっちの駅に行くから。

ユキ：うん、わかった。じゃあね。(電話を切る)

[土曜ドラマ館]

また、話し手が接続助詞で終わることを見込んで発話しても、必ずしも意図が十全に理解されるわけではない。これが示唆するのは、接続助詞の文末用法が本質的に聞き手による状況理解に依存しているという点である。

(46) 仁：伊東さんは・・・手術は初めてですね？

緑：ええ。あの・・・雑誌の広告で拝見して、この先生なら信頼できそうだなって・・・。

仁：あっはは、それは光栄です。写真映りは良い人に見えるみたいだな。

緑：いえ、そんな。本物・・・いえ、ご本人も素敵です！

仁：それはどうも。で、手術の箇所は？

緑：あのう、目を二重にしたいんですけど。

仁：ああ・・・今の状態だと奥二重ですねえ。つまり、もう少し二重のラインをはっきりさせたいという事ですか？

緑：ええ。

[土曜ドラマ館]

ゴールが認知されなければ、ケドの文末用法は認可されず、リペアが要求され、結局主節が述べられることになる。

(47) 娘：先日はごちそうさまでした。

先生：ごちそうさま？

娘：はい、この前の食事のことです。ありがとうございました。

先生：ああ、そうだったね。ごめんごめん、最近忙しくてボーッとしてたんだよ。

娘：それであの話なんですけど・・・。

先生：あの話？

娘：ひどい！本当に忘れたんですか！それとも忘れたフリですか！

先生：ごめん、メモとるのを忘れててもう一回言ってくれないかな。

娘：メモ！先生は自分がプロポーズしたことをメモしてなきゃ忘れてしまうんですか！

先生：プ、プロポーズ！

[土曜ドラマ館]

以下の例では、ゴールの認知が遂げられていないが、主節が述べられても無い。ここでは、ゴールの認知がしばらくしても遂げられないことで、相互行為自体が破綻している。

- (48) 省吾：あなたが誰なのかなんてもうどうでも良いから、頼みをきいてくれませんか。  
 サリー：何？  
 省吾：俺、福岡の出身なんですけど。  
 サリー：だから？  
 省吾：実家の農業を継ぐのが嫌で、家を飛び出して来たんですけど・・・。  
 サリー：だから。  
 省吾：上手くいかなくて。  
 サリー：で？  
 省吾：田舎の両親に伝えて欲しいんです。  
 サリー：何を？  
 省吾：親孝行できなくてご免なさいって。  
 サリー：自分で伝えれば。

[土曜ドラマ館]

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、以下の点を論じた。先行研究は、この形式成立における聞き手による能動的な情報利用を過小評価している。これに対して、本稿では状況全体の理解の観点から言語使用を捉えなおす必要を論じた。接続助詞文末用法は、従属節に示される情報が、状況理解に対する情報に対してはたらくことで、聞き手の反応行動を引き起こしているもの捉えることができる。

その一方で、本稿には扱われなかった重要な問題も残っている。一つは、接続助詞の文末用法の中でもより慣習的な言い回しから、新規性の高いものまで程度の違いがあると思われるが、その点は考慮しなかった。また、カラやケドの場合、文末用法の多くがノダを伴っていることを考慮すると、このノダの貢献をきちんと評価する必要がある。これらの問題は今後の課題としたい。

## 注

1. 現代日本語研究会(編)(2002)のデータは、実際の会話の録音を書き起こしたものである。以下に、表記に関する凡例を示す(現代日本語研究会(編)(2002: 27-29)に基づく)。

↑：上昇イントネーション

↓：疑問下降イントネーション

★：発話の途中で他の話者の発話が始まった時点

→/←：前の話者の発話に重なった部分の始点と終点

{ }：発話途中の他の話者によるあいづち

<笑い><沈黙>など：状況に関するコメント

[名字][会社名]など：個人名、企業名などを伏せるための表記

#：聞き取り不明

なお、【】は会話の状況に関する筆者による補足である。また、太線および下線による強調は筆者が付け加えたものである。

2. 出典を記していない事例は、全て筆者の作例である。
3. 「便宜上」としたのは、「文」という言語単位を仮定することは様々な問題を孕むからである。
4. 引用における太字による強調は全て筆者によるものである。

#### 参考文献

- Blakemore, Diane. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Halliday, M. A. K. and Ruqaiya Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- 本多啓. 2001. 「文構築の相互行為性と文法化—接続表現から終助詞への転化をめぐって—」, 山梨正明・辻幸夫・西村義樹・坪井榮治郎(編), 『認知言語学論考 No.1』, ひつじ書房, 143-183.
- 国立国語研究所. 1951. 『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』, 秀英出版.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: Cognitive basis of Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2001. "Discourse in Cognitive Grammar," *Cognitive Linguistics*, vol. 12-2, 143-188.
- Levinson, Stephen. C. 1979. "Activity types and language," *Linguistics*, vol. 17, 365-399.
- Levinson, Stephen C. 1981. "The Essential Inadequacies of Speech Act Models of Dialogue," Parret, H., M. Sbisà and J. Verschueren (eds.), *Possibilities and Limitations of Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins, 473-492.
- Levinson, Stephen. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 前田直子. 1995. 「ケレドモ・ガとノニとテモ—逆接を表す接続形式—」, 宮島達夫・仁田義雄(編). 『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』, 東京: くろしお出版, 496-505.
- 益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法 改訂版』, 東京: くろしお出版.
- 南不二男. 1974. 『現代日本語の構造』, 東京: 大修館書店.

- 森田良行. 1980. 『基礎日本語2』, 東京: 角川書店.
- Ohori, Toshio. 1995. "Remarks on Suspended Clauses: a Contribution to Japanese Phraseology," Shibatani and Thompson (eds.), *Essays on Semantics and Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins, 201-218.
- Ohori, Toshio. 1997. "Framing Effect in Japanese Non-Final Clauses: Toward an Optimal Grammar-Pragmatics Interface," *Proceedings of the 23rd Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 471-480.
- 大堀壽夫. 2004. 「文法化の広がりと問題点」, 『言語』, vol.33, no.4, 東京: 大修館書店, 26-33.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London: Longman.
- 齊藤美穂. 2005. 「複文と会話の構造—ガ・ケレドモが思考・発言動詞に接続する場合を中心に—」, 『日語日文學研究』 vol. 53, 韓國日語日文學會, 215-234.
- 高橋太郎. 1993. 「省略によってできた述語形式」, 『日本語学』, vol.12, no.9, 東京: 明治書院, 18-26.
- Thomas, Jenny. 1995. *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics*, London: Longman.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』, 東京: くろしお出版.
- 山下明昭. 1997. 「類義語表現—「のに」・「にもかかわらず」・「けれど(も)」・「が」—」, 『表現研究』, vol.65, 44-51.

#### コーパス

##### [現代日本語研究会]

現代日本語研究会(編) 2002. 『男性の言葉・職場編』, 東京: ひつじ書房.

##### [土曜ドラマ館]

『西鉄提供ラジオ番組「土曜ドラマ館」シナリオ集』

<http://www.nishitetsu.co.jp/nnr/inf/drama>

[毎日新聞] 『CD-毎日新聞'95 データ集』, 東京: 毎日新聞社.

[サンケイスポーツ] 『サンケイスポーツ』 2005年10月22日記事